

佐伯史談

第一〇九号

「郷土史研究」誌
通算一三二号

昭和五十二年六月三十日発行

佐伯史談会

事務局 佐伯市大字福徳堂龍蔵寺 羽柴芳

巻頭言

山のようにある 運営課題

佐伯史談会の今後について、現状を
もって満足せず、さらに前進を

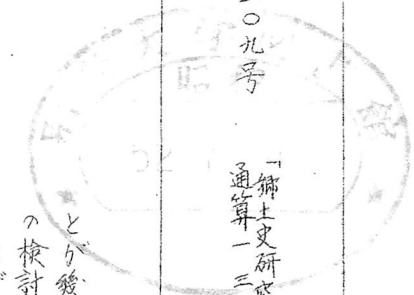
副会長 羽柴 弘

「佐伯史談」は一昨年五月に百号に達し、それから既に満二分年経過しているのに、遅々としてまだ百十号に達しない。我ながらもどかしい思いである。

この責任は私にある。三年前から蒲江町に仕事が多えられ、その町史編さんに時間と精力をとられ、隔月発行を年間四回発行、つまり季刊ということにしてはいるが、役員会の諒承も得たのであった。

やと「蒲江町史」も脱稿したので、五月中に発行を目標して、原紙きりを急いでいる次第で、これからはいよいよ半年六回、いや号外速報版位を出して、毎月発行に持ちこたたいものである。会員の皆さんから積極的なご支援、ご投稿を頂きたい。

さて、ここ数年来、私はひそかに思いつづけているこ



とが幾つかある。ざっくりばらんに打ち出して、会員諸氏の検討を仰ぎたい。

まず第一は、月例史談会の開催である。毎月が理想であるが、最初は隔月(偶数月)でよい。特定の会場で定例的に開く。文化会館が佳吉御殿、少い広すぎると、会員の家庭でもよい。定例日を偶数月、第二土曜の午後一時から、計画的な研究発表や特寄りの資料の検討、意見の交換などで、この会に先輩長たちをお招きして、お話を聞くことも出来る。

第二に地区研修会、これは数年前からその小手調べのように、何か所かで開いているので、段取りだけすれば実現は容易である。佐伯市内で又は区別方面別に数ヶ所、郡部は町村毎に、任意のテーマ、時期方法を考へ、実習や作業を加味してやり

本号の内容

- 巻頭言 山のようにある運営課題……一
 - 研究 豊後国司の戸籍調べ(佐伯)……三
 - 史談 盛徳物語(飯山町史之巻)……六
 - 歴史 望御史話(高手洗)……七
 - 伝記 葛原岩戸村(野口正二)……二
 - 志 善徳(西元由雄)……四
 - 史料 下直見年代記(四)……五
 - 叢書 蒲江佐伯村史(天守)……五
 - 史談 ながさきと元治(中瀬)……五
 - 研究 洪水災害の報告(内田氏提供)……五
 - 研究 山口の五穀成就(柴次郎)……五
 - 系 西郷の後百周年二話……一〇
- 史談会の事業・図書取寄・新聞図書
資料授受・集金案内・会費受領

たい。しかしこれは何十人も人を集めようと、初めから考へたくない。その地区から七、八人、史談会本部から三四人といったところ、長つづきしなくてはならない。

第三に実地学習会をもちたい。写真による資料撮影、テープレコーダーによる録音技術、金石文の拓本実習など。また資料パンフレット、あるいは破損圖書の修理を含めた製本技術など、手軽に覚えて以後太いに役立つことかいろいろある。

第四にグループ組織による、研究の分担・協力である。「類をもつて集まる」といわれている通り、同好者がたえず連絡をとり合い、研究内容にツながりをもちながら協力しあつて効果をあげようというものである。これは多少今までも行われていたが、例を挙げると次のようなグループが考えられる。

- 考古グループ ○中世史グループ ○近世史グループ
- 民俗文化グループ ○文化財グループ ○地誌グループ
- 写真グループ ○古塔グループ

更に、私たちは御上丈へ御上かすべてを合む」という象牙の塔にこもっているのではなく、大いに地域社会に奉仕しなくてはならない。例えば先年私が史談会が率先して、三ノ尾櫓門の改修保存に取組んだように、みんなのお役に立ちたい。これはもう思いつくままその項目をあげると、

- 史跡・文化財の保存保護（標示案内板の設置も合せ）
- 自然を守る運動参加（公害排撃など）
- 歩こう会運動への参加 ○文学碑、記念碑の建設

○各地の歴史や文化を訪ねる研修旅行の主催
まずこんな事が考えられる。その外いろいろあるが、私たちは四五〇の会員の協力がよつて、積極的にならなければならない。地域社会のお役に立ちたいと思つてゐる。

このように、佐伯史談会が組織をあげ、会員諸氏の協力によつてやりたうことはいろいろある。しかし、それが思うように運ばない悩みがある。例えば、現地研修会を聞いても、参加する会員が少くない。春休みのほかきき出席でき、そのな會員五十人に出席したとする。出席者は十五人かせいせい二十人。平日は勤めがあるのでもうもならない。休日には職場も地域の行事で差支えたりで、いつでも出席できる定連は、七十歳あちこちの老人たち数人といふたところである。止むを得ないことである。

だからと言つて、私は決して會員に失望したり、することと意欲を失つていない。會員は直接参加しなくとも史談会の事業に対しては、それそれ理解を持って協力してくれてゐることを疑わない。少くとも会費も寄付によつて、物的な援助をして下さつてゐる。ありがたうである。

佐伯史談会には、今年は今年の夢がある。とくに秋の研修旅行には、例年の通り二泊三日のバス旅行、行先は熊本・島原・平戸を巡る計画である。

秋は忙しい。悲劇の梅竿礼城主佐伯惟治父子の、死没四百五十年目である。当然追悼供養のこと、尾高知の峰での墓前祭も考えられる。

来春のこと、鬼に笑われるかも知れないが、来春三月は佐伯史談会発足満二十年になる。大いに祝つて記念行事をもくろむたい。物故會員の追悼行事も加えたい。

こんなことを考えると、山のように仕事があつて立ちあはたか。なに、みんなが一致協力して、積極的に押し進めるだけである。會員諸士の奮起を望むこと切である。